

## 昇格は絶望的に

厳しい現実を突きつけられた。第18節・桐蔭大との直接対決に敗れ、残り4試合で勝ち点差は「8」へと広がった。桐蔭大が後、勝点2を積み重ねれば、駒大の昇格の可能性は完全に絶たれる。昇格はほぼなくなったと言っただろう。

後期リーグが始まり、桐蔭大との直接対決を含めた結果は3勝4敗。勝ったり負けたりが続き、試合の内容も決して安定したものではなかった。もちろん、2部のチームの実力が拮抗しているとも言えるかもしれないが、駒大の戦力であればもっと結果が出てもおかしくなかった。では、なぜ不安定な戦いが続いてしまったのか？その理由を考察していきたい。

## タワー型FWの不在

駒大のサッカーのスタイルは「ロングボール」。その最大の特徴は、ボールを奪ってから手数を掛けずに素早く攻めること。相手の守備陣形が整うまえに攻めきることがポイントとなる。しかし、当然ながら相手の守備陣形が整った状態から、攻めなければならぬ状況はある。その場合、多くのロングボール中心に攻めるチームは、FWにヘディングが得意な選手を配置し、その選手が競ったこぼれ球を拾って攻め込む。ところが、駒大のFWを務めていたのは山本、または宮城とヘディングに絶対的な自信のある選手ではなく、いい場所にボールを落とせることは少なかつた。187cmと上背のある小牟田も控えていたが、出場機会はあまりなかった。

## 多すぎる失点

後期リーグ7試合を戦い、失点の数は何と「17」。これは、1試合で約2.5失点するペースだ。この原因について選手に聞いてみても正直、分からないという答えが多かった。確かに、どの選手も激しく前からプレッシャ

# なぜ、不安定な戦いが続いているのか？

まさかの結果となっている駒大、不調の原因分析



ーをかけていたはずだが、全体が運動していない場面も少なくなかった。前線の選手はプレスに行っているが、最終ラインが低いままであったり、反対にラインを上げれば簡単に裏をとられてしまう。一人一人が走っていたとしても、運動しなくては意味がなくなってしまうのだ。

第12節の亜大戦はまさにその状態だった。前半は前から激しくプレスをかけるも、最終ラインが低く、中盤で数的不利に。後半に入り、ラインを上げると今度は裏のスペースを突かれ、結果は5失点。完全に後手に回っていた。

## 稚拙な試合運び

負けた試合はいずれも、同点に追いついてからすぐに失点してしまったり、2点をリードしながら逆転負けを喫するなど、試合運びのまずさを露呈した。この原因は常にロングボールしか蹴れないところにある。

リードした状態でも、ロングボールばかりのため、すぐに相手ボールになってしまい、守備の時間が長くなっていた。当然、守備の時間が長くなれば失点の可能性も大きくなる。プロのチームでも90分間、蹴り続けることは不可能である。碓井も「蹴らないでつないでいければ楽になる」と話していたが、チームでその考えを共有することは出来なかった。

## 残り4試合、目標を明確に

桐蔭大戦後はさすがに選手の意見もまちまちだった。昇格へ僅かな可能性を信じる選手もいれば、もうさすがに厳しいと言う選手もいた。だが、チームの目標がはっきりしなければチームはバラバラになってしまい無駄な時間となってしまうだろう。

全力で戦うことに変わりはないが、僅かな可能性でも信じて戦うのか、それとも来季を意識した戦いをするのか。明確にしなければならぬ。残り4試合、来季のためにも意地を見せて欲しい。  
(猪熊脩登)